

〔基調報告〕

日本台湾学会の10年を振り返って

春山 明哲

はじめに

1. 学会活動の経緯と現状
 2. 研究成果の概要と特徴
 3. 関連する学会内外の出来事
- むすびとして

(要約)

日本台湾学会が1998年に設立されてから今年で10年になることを機に、学会活動の経緯と現状をとりまとめ、研究成果の概要と特徴の分析を試みるとともに、関連する学会内外の出来事にも触れた。

学会の会員は当初の2倍の460名を数え、毎年、学術大会の開催のほか、部会・例会が行われている。『日本台湾学会報』と『学術大会報告者論文集』に掲載される論文・報告は年々増加している。『ニュースレター』とホームページによる情報発信も充実し、文献目録の整備も進められた。財政状況も安定しており、この10年、学会は大いに発展してきた。

論文と報告をその主題によって分析すると、台湾研究の特徴である「歴史の重層性」と学際性、領域際性が浮かび上がってくる。また、台湾との学術交流も盛んに行われ、学会のこの10年は、台湾における台湾研究の発展と響きあう時間を共有してきた。

台湾研究は米国、欧州でも活発になってきており、今後の国際的な展開も期待される。

はじめに

日本台湾学会が設立されたのは、ちょうど今から10年前、1998年5月30日のことであった。東京大学本郷キャンパスで開催された設立大会に参加した方は、あの日の会場のなんともいえない熱気を覚えていることだろうと思う。少し暑い日で窓が開け放たれていて、私の席からは安田講堂が眺められた。会場となった法文2号館の大教室は、吉野作造の講義がなされた大正デモクラシーにゆかりの深い場所で、日本台湾学会の「船出」にふさわしい舞台だな、とぼんやり考えていたことを覚えている。

さて、この10年の日本台湾学会の活動をふりかえるにあたり、学会活動の経緯と現状、研究成果の概要と特徴、関連する学会内外の出来事について簡単にふれ、最後に私の感想を述べたいと思う。なお、関西地域については下村先生が、また、各分野の具体的な研究状況についてはパネルディスカッションがこのあと予定されているので、私からはアスペクトを、ごく概観的な「この10年がこうも見える」という報告をさせていただく。

1. 学会活動の経緯と現状

学会活動の経緯については、学会のホームページが発信と記録のメディアとして、その内容も

充実してきたので、詳しくはそちらをご覧いただきたいと思う。ここでは、学会活動の状況を示すデータと事実を項目別に挙げておく。

〔会員数〕 当初（1999年4月）233名だった会員は、現在（2008年5月）460名を数えるまでに なった。10年で約2倍になったわけである。そのうち、約30%は台湾からの留学生と台湾在住の 台湾人研究者である。また、学生は約27%を占めている。

〔学術大会〕 設立の翌年の1999年から毎年学術大会を開催している。はじめは学会の力量か ら、2年に1回がせいぜいではないか、との見通しもあったようだが、結果として10年間毎年開 催できたのは、少し前に流行した言い方を借りると、会員全体のいわば「学問力」の賜物といっ てよいと思う。開催地は当初東京が続いたが、その後、名古屋、大阪、天理と、関西地域でも 開催された。これも各地域の会員によるご尽力の成果である。

〔部会・定例研究会〕 学術大会とは別に、各地で部会と定例的な研究会が行なわれている。関 西部会については下村先生からご報告があると思う。東京の定例研究会のほか、台北の定例研究 会が非常に活発に行なわれている。

〔論文・発表〕 毎年『日本台湾学会報』と『学術大会報告者論文集』が刊行されているが、そ の論文・発表の内容については後に申し上げる。

〔ニュースレター・ホームページ〕 会員相互のコミュニケーション及び学会からの情報発信の ため、年1～2回『日本台湾学会ニュースレター』を発行し（現在13号）、また、ホームページ を運営している。ホームページのコンテンツは、この『ニュースレター』のほか、学会からのお 知らせ、理事会や定例研究会の記録、学術大会の報道写真、関係学会のリンクなど、徐々に充実 してきた。

〔文献目録〕 研究の共有資源としての文献目録は学会設立当初から力を入れた事業であった。 ホームページに掲載されている「戦後日本における台湾関係文献目録」のデータ数は、2008年3 月現在、7659件になっている。検索方法もいくつか用意されているので活用いただきたい。

〔運営・財政〕 学会の運営方法には変遷があるが、現在は理事長・副理事長、常任理事会・理 事会が運営にあたり、常任理事が各事業を分担している。また、事業・地域別に幹事をお願いし ているほか、学術大会のための企画委員会及び実行委員会、『日本台湾学会報』の編集委員会が ある。学会の財政は一時厳しい状況にあったが、一般会員の増加、会費納入率の向上（約75%） に加えて、財団法人・交流協会からの学術交流助成、財団法人・台湾協会からのご支援、それに 賛助会員のみなさま（機関・個人）のご支援を得られたことにより、現在は安定している。交流 協会、台湾協会、賛助会員のみなさまには、この場を借りて厚くお礼申し上げたい。

2. 研究成果の概要と特徴

つぎに、日本台湾学会における研究成果の概要と特徴についてご報告したいと思う。とはいっ ても、どのような視角や尺度から見るべきだろうか。最近では、学術研究活動に対する客観的 「評価」の制度化と、その厳格な運用が進められているようで、一部には「成果主義」の弊害も

出ているようである。幸い私達の学会は会員の主体性と自主的活動のみによって支えられているので、その研究テーマの選択は「台湾研究」そのものへの研究関心を反映しているのではないかと、とりあえずは仮定できるのではないだろうか。つまり、ポストの有無や収入の多寡によって研究テーマが左右されることはない、という仮定である。

さて、設立大会において、「台湾研究」とは何か？」というテーマの記念シンポジウムが行なわれた。そこでの司会者および5名のパネラーの発言が『日本台湾学会報』の第1号に載っている。今読み返してみると、この「新興の研究分野」へのそれぞれの意気込みと学問的方法論とが適度なバランスで展開されていて、緊張に満ちた知的さわやかさ、といったものを感じる。

このうち、司会者冒頭発言として若林正丈先生が、「台湾研究」のイメージとして、次の4点に触れた。(1) 地域研究 (area studies) の対象としての台湾の濃厚な個性は、住民構成の「歴史的重層性」と「台湾アイデンティティの転変」にある。(2) 「台湾研究」(Taiwan studies) は、二重の学際性、すなわち、学問の諸ディシプリンの知見による理解とともに、「領域際的」な隣接分野との有効な関わりが求められる。(3) 台湾研究という学問の社会的効用は地域間の相互理解の基礎を厚くすることにあり、そのためには「台湾研究」は開放的である必要がある。

(4) 国民国家パラダイムとナショナリズムによって学会という学問上の公共財をゆがめてはならないが、「台湾研究」に貢献するものであればこれを積極的受け入れる態度、リベラリズムとプラグマチズムを実践的指針としたい。

これらのうち、最初の2点は「台湾研究」の個性（研究の与件）であるとともに、その発展の方向、あるいは条件を示すもの、といってもよいであろう。

今回、学会の研究成果の概要と特徴を把握するにあたり、「歴史的重層性」はどのように見られるか、「学際性」はどのように現れるか、という検討を試みた。

具体的な方法は次のように簡単なものである。『日本台湾学会報』の1～9号に掲載された論文154本と、『学術大会報告者論文集』の1～9回に掲載された報告79本、合計233本を対象として、その「主題」を分類した。分類は、分科会と学会賞の区分に準拠して、政治・経済・歴史・社会・文化・文学・教育の7項目とした。233本の論文・報告を、この7つの「主題」に分類するわけである。

ただし、少し工夫した点がある。一つ目は重複して数えないこと、つまり、政治と経済の両方に跨る主題であってもあえてどちらかに振分けることにした。傾向を見るには単純化したほうがいいからである。二つ目は、横軸として時代区分、すなわち、①～1985年（清朝以前）、②1895～1945年（日本統治期）、③1945～1986年、④1987年～現在、の4つの時代区分を設けてみた。戦後を1987年（台湾で戒厳令が解除された年である）で二つに区切ったのは、「現代台湾」への関心を明確にするためである。つまり、「政治」に分類される論文であっても、それが日本時代の「総督政治」を論じたものなのか、それとも国民党による「権威主義的」政治の時期を対象としたものかでは、研究関心の質が多いに異なるからで、この点を区別したいと考えた。三つ目は、台湾の先住民である「原住民族」をテーマにしたものについては「重出」した。このテーマはこの10年、研究関心が高まった分野であり、政治、経済といった主題だけでは「もぐってしま

う」からである。以上の作業の結果は下表のようになった。

	清朝以前	日本統治期	1945～1986	1987～現在	小 計
政 治	0	5	23	18	46
経 済	1	14	3	13	31
歴 史	2	17	0	3	22
社 会	0	15	3	11	29
文 化	0	8	9	15	32
文 学	0	43	8	10	61
教 育	0	6	5	1	12
小 計	3	108	51	71	233
原住民族	(0)	(7)	(2)	(12)	(21)

この表からいくつかの傾向ないし特徴を読み取ることができる。

まず、第一に「歴史の重層性」は明かである。各主題分野の論文に日本統治期あるいは国民党統治期の歴史記述が現れるからである。とくに日本統治期は全体の46%に達している。また、住民構成についても原住民族が21件（9%）で重層性がある。ただし、日本統治期の政治、経済の研究は、かつては「主流」だったのであるが、いまはきわめて減っている。それとともに、1945～1987年の国民党統治期の「政治」が23件と10%を占めていること、また、1987年以後の「現代台湾」が全体の3分の1を占めているのも注目される。

第二に「学際性」であるが、この表から直接読み取ることにはできないが、作業を通じて各論文のうち「複合主題」を持っているものが多く、分類が困難だったことが、台湾研究の学際的性格を傍証している。例をあげれば、学会賞の対象となったある論文は、歴史・社会、文化・文学・言語、政治・経済の「3部門」のすべてにノミネートされていた。

第三に、この系として、「領域際的」学際性という点から注目されるのが、「文学」である。全体の件数からも分かるようにこの分野の研究結果は多く、とくに日本統治期の43件はこの表のマトリックスの最高値である。設立大会で山口守先生が「越境する文学と言語－中国文学・台湾文学・日本文学－」という報告をされたが、まさに「文学」は領域際的である。このことは別の面から見れば、「台湾文学とはなにか」という学問的アイデンティティへの問いが、「台湾研究」全体のアイデンティティ問題の特徴を集約している、あるいは象徴している面がある、ということを表しているといえるかも知れない。

なお、論文・報告者のうち77本、全体の3分の1が台湾からの留学生、台湾在住の台湾人により発表されたものであり、学会賞受賞論文12本のうち半分を占めている。量質ともに「領域際的」学会といえるだろう。また、このような現象は日台の活発な学術交流の成果を反映している。

データの分析とは離れて、一つ指摘しておかなければならない点は、毎年台湾から研究者を

招聘して行なわれている講演である。設立大会における陳其南先生の「五十年来台湾研究の回顧」を皮切りとして、ほぼ毎年台湾の卓越した研究者をお招きして、「台湾研究とはなにか」という根底的な問題に関わるテーマについて、台湾の学界の動向、研究レビュー、理論的諸問題などを聴取し、討論する機会を持ってきた。

いま、これらの講演記録を通して読み返してみると、「台湾この10年」における「台湾学」のダイナミックな生成・発展を見ているような気がする。さながら「同時代史としての台湾学術史」を、わたし達はこの日本の学会において「目撃」しているかのような学問的臨場感がある。その意味では、「日本台湾学会この10年」は「台湾における台湾研究、この10年」と、共振し、また、響き合う時間を共有する幸運をも持ったともいえるのではないだろうか。

そして、本日、台湾中央研究院の前院長でありノーベル化学賞の受賞者である李遠哲博士をこの記念すべき大会の記念講演者としてお迎えできたことは、大きな喜びである。

3. 関連する学会内外の出来事

この10年、日本台湾学会の内外において、台湾研究に直接・間接に関する出来事があった。それらは、『ニュースレター』の各号、ホームページの記事に多く再録されている。

これらの出来事のうちに、まず、大きな哀しみを持ってご報告しなければならないことは、劉進慶先生（2005年）、石田浩先生（2006年）、涂照彦先生（2007年）が相次いで逝去されたことである。日本台湾学会の重鎮であるばかりでなく、台湾研究の偉大な先達であり、よき研究仲間でもあった諸先生をかくも早く失ったことは痛惜の極みであるが、明日の第11分科会（実行委員会企画）で、「涂照彦・劉進慶の仕事を読み直す」という報告が予定されているので、あらためて両先生の学問を知る機会となるだろう。「台湾研究」も孤立した山が点在する風景ではなく、多くの山岳から成る連峰という「学問的伝統」の形成へと進む時期なのかも知れないと思う。

自然の脅威はいつ襲ってくるかわからない。1999年9月21日の台湾大地震は大きな人的・物的損害を台湾にもたらし、台湾在住の研究者にも損害を与えた。この際には多くの会員が復旧・復興の支援活動を行なった。また、2003年にはSARSの被害拡大を食い止めるため、折柄開催されていた大阪大会（関西大学）への台湾からの研究者の参加が不可能となった。当時の石田浩理事長はじめ大会実行委員会の方々のご苦労は大変なものがあった。今また、新型インフルエンザが心配されている。「安全・安心」は学会活動の前提であり、これからも不測の事態に対する心構えは必要なことだろうと思う。

海外においても台湾研究が発展している。北米洲台湾研究学会（North American Taiwan Studies Association、1994年設立）の会議には台湾学会の会員が参加したことがある。2004年にはロンドン・スクール・オブ・オリエンタル・アンド・アフリカン・スタディーズ（London School of Oriental & African Studies, SOAS）を拠点として、欧州台湾学会（European Association of Taiwan Studies）が設立された。第5回の研究大会が今年4月、チェコのプラハで開催されたが、その3日間にわたるプログラムを見るとなかなか興味深いテーマがある。台湾研究のグロー

バル化（適切な表現かどうか、分からないが）の現象とも見られ、私達の研究と活動の領域を広げる機会ともなるだろう。

国内各地における台湾研究に関する活動もごく最近の「高一生シンポジウム」（天理大学）、中京大学社会科学研究所台湾史研究センターの設立など、紹介したい動きは沢山あるが、時間の関係もあり省略する。

むすびとして

最後に、「日本台湾学会この10年」をふりかえっての私の感想を述べたいと思う。

「座右の銘」などというやや古めかしい感じがするが、私が中学生だったころ知って好きになった言葉がある。それは「学んで思わざれば暗く、思うて学ばざれば危うし」という孔子の言葉である。この言葉の解釈はいろいろあるようだが、私は「学ぶ」＝「学問」と「思う」＝「人生」の関係を表したものだとして勝手に解釈してきた。「学問」と「人生」の関係とは、「社会」あるいは「公共性」とつながるものであろう。

日本台湾学会という場は学問を志す者の場であるが、同時にここに集う人々の人生の一齣でもある。ここでの活動や交流が、日本・台湾の社会に裨益し、東アジア・世界の公共的な知に貢献できれば素晴らしいことだろうと思う。これから予定されているパネルディスカッションでは、そのような視点も含めて、「これからの10年」を大いに語っていただくことを期待している。

ご清聴に感謝する。